

レントゲン写真から浮かび上がる「中身」

中山 陽介（ASP 学科・4 回生）

人生で初めて見たレントゲン写真は、まだ小学生だった頃に医者から見せられた、骨折した自分の足のレントゲン写真だった。医者の説明もあったためか、レントゲン写真には、体から透かし出された足の骨が見事に写っていると、その時は納得していた。それから理科の教科書で度々見てきたレントゲン写真は、自分が見たい、あるいは知りたい「ものの中身」を都合良く写し出してくれる便利な仕組みだと思い込んできた。その為か、京都大学総合博物館で行われていた「科学技術 X の謎」には、訪れる以前は、自分がすでに慣れ親しんだ（と、思っていた）レントゲン写真の詳しい解説が展示されている程度だろうと考えていた。

実際に会場を訪れてみると、期待通り「ものの中身」が見えていると納得させてくれる、骨が透けているトキのミイラや、内部の配線が見えているロボットのレントゲン写真が展示されていた。しかし、それらと合わせて、実物よりも美しい二重螺旋模様を描く貝殻や、ほとんど米粒しか写っていないおにぎりのレントゲン写真も並べてある。そして、今回自分がギャラリートークのナビゲーションをすることとなった卵のレントゲン写真もそこにあった。

X線で透かし出された卵は、写真の黒いフィルムを背景に、殻の部分にあたる楕円形の曲線がくっきりと白く浮かび上がっていた。その写真によって、普段何気なく手にとる卵の形が、美しい、と思わされた。殻の曲線とは反対に、殻の内側はぼんやりとモヤがかかった様になっている。レントゲンは、中身をはっきりと写し出してくれるはずなのに、X線を通して隠されたままの卵の内側は、そこに何があるのかを知りたいという欲望をかき立てる。被写体の卵がそこにあれば、手に取って割れば、透明の白身に包まれた黄身が流れ出てくるだろう。それは、卵焼きからケーキのスポンジの材料など、人の食生活のいたるところで使われる重要な食材である。もしも食用にならなければ、ひなが孵っていたかもしれない。しかし、X線はそれらの事実を写さない。レントゲンは、必ずしもこちらが望む「ものの中身」を写し出す訳ではないのだ。

レントゲン写真に写らなかったものを見ようとした時、卵であれば、内側のモヤから卵をとりまく様々な事実が浮かび上がった。自分達が何を見ようとしているのかによって、レントゲンが写し出すものは変わる。今回の展示、そしてナビゲーションを通して、レントゲン写真という科学が生み出した技術は、何を見たいかという「見る人の中身」をも写し出すことが浮かびあがった。

